

# 「百灯笼」に参加して

文・秋元カヲル(ギタリスト)

百灯笼でのエポさんと秋元カヲルさん



Pix by Tadanori Sato

旅に出ると、音を探してしまふ。そんな癖のようなものが随分と以前からボクにはあります。しかも追い求めているのはどちらかといえばラジオやレコード店等から聞こえてくるような類のものではなくて、その場所固有の生活や時間と不可分に存在する音、その土地に息づく言葉や信仰、祈りに直結する

或いはそのものである音楽です。何故ならその響きの最中に、今そこで生きている若しくは嘗て生きていた人々とその土地を形作るすべての存在の確かな証が、細やかに織り込まれている気がするからです。

夏の盛りの八月十七日、ボクはエポさんのライブでギターを弾くために、大施食会「百灯笼」のおこなわれる玄松院へ伺いました。到着したのは、檀家のみなさんがテキパキと準備をされている頃合。作業をされているかたがたの頭上のスピーカーから大音量で流されている演歌の迫力にびっくりしながらも自分達の音の調整をすませ、夕食をいただきたいと、「そろそろ法要が始まりますよ」とのことで、本堂へと向かいました。

檀家さんたちの後ろからそーっと覗いてみれば、本堂の中程、立派な椅子に腰掛けられた御住職さんを挟むように左右に、僧侶のかたがたが向かい合わせで立たれて、ときおり御住職さんと掛け合うような形で読経しておられました。それはリズム

こそ全く違いますけれども、パキスタンの宗教歌カツワリ等も少しく想起させるものでした。

そして僧侶のかたがたの読経がすむと数人の檀家の女性がたの、ひとしきりの御詠歌。それはとても儂く、それでいてなお力強く、目眩を覚えるほどの暑さに揺れる夏の宵、境内から表に掛けて並んで浮かぶ灯笼の、白くて淡い光の間に、漂い漂い、糸を引きながら消えてゆきました。決して流麗な謡いではない、でもそれだからこそ本堂の御詠歌。思いのこもった、生きている祈りのうたが、先程の読経の声々と共に静かにボクの心を打ってゆきました。余韻を噛みしめるために境内に出、お面の屋台や灯笼をながめながらふっと溜息をついたものです。

実はボクは物心ついた時分から十代の後半まで所謂キリスト教的環境のなかで育ちました。住んでいたアパートの隣には小さな教会があつて日曜はミサ、家の窓を開ければ形ばかりではありましたが御堂のステンドグラスが見えるといった具合です。そして大分時間が経って、イスラム圏や正教の国々を訪れ、さまざまな国籍の人と語りあい、あらためて自らの「根無し草」ぶりに思いを馳せて、聖書を読み直し、賛美歌やブルースをとらえ直す作業をしてい

でしよう。

しかし私たちは、そのお婆さんが、仏飯を食べる理由をお婆さんになぜ話さなかったか、ということも考えなければならぬと思うのです。

敗戦による自信の喪失と価値観の大転換のまえでは、伝統と信仰に立脚した理由も、むなしくしか聞こえない時期があつたのかもしれない。

今、子どもに「大事にしたいものは？」と聞くと「家族」と答えるそうです。子どもたちは危機にひんしているものがか直感的に知っているのでしょうか。だから大事にしたいものは「家族」と答える。今こそ失いかけている日本の伝統と文化を子や孫に伝えるチャンスです。その役目を果たすとき、お爺さんやお婆さんは必要とされ、家族は、数珠のようにつながっていくのではないのでしょうか。



〒987-0024 宮城県遠田郡美里町中峠字十二神117 三浦 正恵

# 数珠

ついに玄松院でも孤独死したかたが出てしまいました。亡くなってから半年〜二年が経っていたとのこと。このかたは、お寺の雑務を手伝ってくれたこともあるかたなので、知らせを受けたときはショックでした。本で読んだことがあります(人間

孤独にはある程度耐えられる。孤独を楽しむ人さえいるのだから。しかし、孤立して(させられて)しまつたら、生きてはいけな。孤立とは、ライフラインが切断されること。人との交流がゼロになること。

これからは都会の人ばかりではなく、私たちの住む町にも孤独死する人が増えるのでしょうか。二人暮らしが多くなっています。やがてどちらかが欠け、一人で暮らす人が出てくる。その先に、一人で亡くなっていくかたがでてくるであろうことは(残念ながら)想像に難くありません。区長さんや民生委員さん、近所の人がかたとき顔を出す。あるいは電話をかける。一人暮らしをしているかたも、離れている子や孫、友人に電話できる関係をなくさないようにする(できれば携帯電話を持つ)。対策はいろいろ考えられそうです。しかし私たちはもつと根本からこうなつてしまつた現実をみつめなおす必要があるのではないのでしょうか。

九月七日、「仏の教えを聞く会」が古川の芙蓉閣であつて、山元町の徳本寺ご住職、早坂文明師が「絆」についてお話されました。「みなさん、絆って良い意味に使いますよね。家族との絆、仲間との絆。信頼感でつながっているイメージが絆にはある。この絆、ほかになんと読むか知ってます?」「ほだす」と読む。「ほだす」とは馬の足を綱をかけ動けなくすることをいいます。自由を奪うのです。しばり、なくして絆はないのです」

私が小さいころ、近所のお婆さんが仏壇にあげたご飯を昼に食べる。「ほかに食べるご飯がないわけじゃあるまいし、仏飯は食べないで欲しい」という悩みをお婆さんがかかえている。そんな話を聞いたことがあります。

「お婆さんが仏飯をいただくということは、ご先祖さまとひとつになつてということ。亡くなった人と共に生きるということなんです。素晴らしい精神性をお持ちじゃないですか」と今の私ならお婆さんに言う

玄松院の  
「平和観音」追弔会

十二月八日(水) 午前十一時  
英霊に手を合わせましょう。  
お詣りにお越し下さい。

吉例  
玄松院の除夜の鐘

大晦日、夜11時45分から

東北新幹線古川駅から徒歩1分  
くらしま齋苑

内覧随時受付中!  
お気軽にお電話ください

大崎市古川駅前大通2-4-12  
総合案内  
0229-23-9111